

## 「総合地球環境学研究所及びプロジェクトの紹介」

総合地球環境学研究所 和田 英太郎

(現在：海洋研究開発機構 地球環境フロンティア研究センター)

定刻になりましたので、ワークショップを始めさせていただきたいと思います。

私は和田と申しますが、今動いておりますプロジェクトのプロジェクトリーダーをやっております。このシンポジウムは、サブリーダーの谷内さんとか脇田さんがオーガナイザーとして、皆さんに出席していただいたという格好になっております。人数は少ないのですが、幸いにもこの分野に関して強い方にお集まりいただけたものですから、本日と明日において実りある討議ができればと思っております。

最初に私のほうから、私どもの研究所の紹介とプロジェクトの紹介をさせていただきたいと思います。

ちょっと見えにくいかもしれませんが、ここに、日本語で総合地球環境学研究所、英語では Research Institute for Humanity and Nature、これだけではわかりませんので、under Global Environmental Issue というのをつけて説明してございます。というのは、これは今の日高所長が動物行動学の先生でございますが、社会科学的なことにも非常に造詣の深い方で、地球環境問題は総じて広い意味での人間の文化とか文明の物語なのではなかろうかというのがこの研究所の設立の第1のコンセプトでございます。

2番目は、それならば人間と自然の相互作用環 (Interactive Cycle) の本質を見極めて将来の展望を提示するというコンセプトであります。その流れの中で地球環境学という学問をつくれるのかどうか、これはやってみなければわかりません。本ぐらいいは全 10 巻なんてできるかもしれませんが、それが果たして地球環境学になり得るのかどうか。

私どもの場合には、このプロジェクトの中で、ミクロ、メゾ、マクロの空間軸をどのようにしてつないで、人間社会全体のあり得る姿を、例えば水系 (Watershed) について描くことができるかどうかをテーマとしております。どういう診断法があり得るか大上段に振りかぶったテーマにしてしまったわけですが、なかなか苦しくて、今のところは診断の方法を開発するということであらうじています。しかもキーワードに「文理連携」あるいは「文理融合」をあげておりますが、文理融合というのは一人の脳細胞の中でしかできないのではないかという意見もありまして、果たして文理連携のブレークスルーが私どものプロジェクトでできるのかどうかといったことを、今日と明日の討議の中で、少しでも全体像がつかめればありがたいと思っているわけでございます。ですからコンセプトとしては、地球環境問題は Problem of Human Culture and Technology の問題ではないか、それから、Interactive Cycle between Humans and Nature system といったようなものというように考えております。

それから、3番目に未来の可能性 (Future Possibility) があります。サステナビリティという言葉が一般的でございますが、ほぼ同義語だと考えていただければと思います。こういうコンセプトでやっていきたいと思いますということになっております。

これが私どものプロジェクト 3-1 空間軸で、「琵琶湖 - 淀川水系における流域管理モデルの構築を

めざして」というところで、心理的にはプロジェクトリーダーは「めざして」に逃げ込んでおるのです。英語のほうでは構築という言葉はなく、「Multi-disciplinary research for understanding interactions between humans and nature in the Lake Biwa-Yodo river Watershed」となっております。こちらのほうが表現形として、私どもにはやりやすいように思います。

このプロジェクトは内閣府の全体的なプロジェクトの1つにも入っておりまして、国土交通省とか、環境省とかの各省のプロジェクトがある中で、文部科学省の中はこれであります。特色としては文理連携というキーワードがありまして、このプロジェクトで文理連携ができるかどうか非常に問われるという形で進んでおります。そのため特に今日の第1日目は、文理の文のほうをどうこなすかというところに合わせて議論が進むことになるのではないかと考えております。そういう意味ではまだ中途の段階で、来年の3月に中間評価がございますので、それに向けて、文理連携もこういう格好だとやれるかもしれないというところまではぜひまとめていきたいと考えておりますので、どうぞ皆様よろしく願いいたします。

どうもありがとうございました。